

? ラテンアメリカ 1 ブラジル 制服と規律

著者	小池 洋一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	88
雑誌名	「きもの」と「くらし」 : 第三世界の日常着
ページ	206-209
発行年	1993
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00017857

Ⅵ
ラ
テ
ン
ア
メ
リ
カ



メキシコ州チャルマの寺院の前で（撮影：星野妙子）

制服と規律

小池 洋一

質素な衣服

ブラジルの旅から東京に戻って印象深いことの一つに日本の衣服の豊かさがある。生地の上質なこと、仕立ての良さには本当に感心してしまう。しかし日本の衣服は実に質素である。遠目には立派な紳士も近づいてみるとその服は粗末であることがしばしばである。日本のように今年はこれこれの色が流行だとか、これこれのデザインが流行だとかいって、それらを追いかけてはあまりしない。テレビのアナウンサーが同じ服を着ていたからといってそれが格別の話題にはならない。日本人にとって衣はそれ自身を見せるとい性格が強くなった。持ち物あるいは経済力を誇示することによって自己主張する最近の日本人の性向につながるのかもしれない。これとは対照的にブラジル人にとって衣はなによりも身体をおおい保護するものであり、身体の美しさを表現し欠点を隠すものである。それらは衣本来の機能であ

る。衣に關してはブラジル人のほうが基本に忠実であると言えよう。

衣に關してブラジル人が基本に忠実なのは衣服に大金をかけられないという事情からもきている。衣食住のうち衣は最後にまわされる。襟が擦り切れ袖がほつれ、穴のあいた服でもそんなに気にしない。もちろん平均気温の高さ、季節による気温変化の少なさという事情もある。それにしても金が余り、しかも一人っ子が多いせいもあって、教育に大金をつぎ込み、高価な衣服を与える国とは違う。

もうひとつブラジルから戻ると印象深いのは日本の衣服の画一性である。背広はどれもこれも鼠か紺色であるというのがそれである。しかしそれは明らかに觀察の乏しさによるものである。よく見ると実に多くの中間色が使われ多様である。一人一人が小さな自己主張をしているのである。しかしそれらは混じり合つて単色に見えてしまう。日本の社会のように。これに比べればブラジルは多様性に乏しい。しかしそこには原色がもつような個性や主張がある。

制服の意味

画一性の象徴が制服、ユニフォームである。日本では制服がさまざまに用いられる。ブラジルにも軍服、白衣（看護婦）、僧服、法服（裁判官）などが存在する。これらの制服は職業、地位などの象徴であり、どの国にも見られる。制服はこうした象徴としての機能のほかに他と区別し同一性を強調し、メンバーの行動を規制したり、帰属意識や仲間意識を高めたりするためにも用いられる。学校、企業の制服がその例である。

ブラジルの公立学校でも制服があるところ、ないところまちまちである。しかし制服があつて

も実際には着ていない子供が少なくない。貧しくて制服が買えない子供もいる。制服がいやだといつてもっとお洒落なかつこうをする子供もいる。着ていないからといって咎められたりはしない。高等学校では公立の場合制服はほとんど見られない。私立学校（その多くがカトリック系）でもまちまちであるが、どちらかという制服がある方が多い。服ではなく帽子（制帽）とか胸につけるリボンを決めている学校もある。規律が制服採用の一つの理由である。規律といつても団体のそれに従うという意味ではない。もつと個別的で内面的なものである。人格形成に高い価値をおき自己修養につとめるといった意味である。こうした価値観はブラジルで優勢なポルトガル人から多くを受けついでいるが、同時に独立後ブラジルが模範としたフランスの教育、とりわけエリート教育に影響を受けている。私立学校が制服を定めるのは生徒に自己修養を期待してのことであった（もつとも彼らが実際に自己修養につとめ、また学校がそれを期待しているわけではない）。制服は有名学校の場合ステータス・シンボルともなっている。

ともあれブラジルでは制服は生徒の行動を団体の規律に従わせるためではない。日本の学校の制服は集団の規律からの逸脱を抑えることがおもな目的となっている。制服の意味は日本の学校とは大分異なっているのである。

制服と帰属意識

職場ではどうか。日本では多くの会社が制服を「愛用」している。安全とか動きやすいということが制服採用の理由の一つである。しかし日本ではそれ以上に制服は労働者に会社に対する帰属意識や仲間意識を高めさせる目的をあわせもっている。

る。高い経済成果をもたらした「日本的経営」は構成員を集団に従属させる脅迫システムをそなえている。制服もそのひとつである。

ブラジルでは制服をもつ企業は少ない。ブラジルの工場ではひとつには安全のために、もうひとつは労働者が仕事着を買えないという理由から制服（作業衣）を貸与している。しかしこうした作業衣を身に付けるのは現場の作業者に限られるのが普通である。生産管理部門、設計部門などの技術者、技術員は作業衣を着ていない。工場長も一般作業者も同じ作業衣を着る日本の企業とは異なる（もつとも日本の工場でも、管理職、エンジニアはネクタイを身に付けるなど小さな差をつけているが）。事務部門で制服を定めている企業はきわめて少ない。

ブラジルでは労働者が企業に対して帰属意識をもつことはあまりない。企業もまたそれを強制はしない。職場でほかの労働者と共通の達成動機をもつて働くこともあまりない。個人プレーが中心である。企業もまたチームワークが生産性に重大な影響をあたえるなどとは強く意識していない。制服をもうける動機がとほしいのである。

（こいけ よういち／アジア経済研究所在サンパウロ海外調査員）